構想『アジア流域文化論』

文部科学省オープンリサーチセンター整備事業の採択にあたって

文学部教授　谷口　満

歴史の研究には、はじめから決まった構想があるわけではない。着想とか方法論といったものは、資料の収集や解読を積み重ねるうちにいつしか形づくられてくるものであって、はじめに構想ありきでは決してないのである。

〝流域文化論〟という見方も、そのような作業の積み重ねのうちに自ずから形成されてきたものであり、それも分野・時代をとわず史学科や経済学部のかなり多くの研究者が共通してこの見方をもつに至ったということは、この見方が歴史研究のすべての分野に通ずる高い有効性をもっていることを示しているであろうし、そして個々の研究者の長年の収集や解読の作業が、まちがったものではなかったことを示しているであろう。今回の文部科学省オープンリサーチセンター整備事業への応募は、研究活動のこのような蓄積と現実をふまえて実行に移されたのであり、それが採択されたということは、この見方にもとづく研究構想が正しいものとして公認されたことを意味していよう。

「Ⅰ長江流域の民族と文化」・「Ⅱアムール川流域の民族と国家」・「Ⅲ北日本の河川―流通と生業―」という三プロジェクトの課題名に、まず構想の意図が集約的に反映されている。長江流域とアムール川流域を取り上げたのは、文化の相互影響などに見られる民族の融合と国家の対立などに見られる民族の相克の対比、あるいは古代～中世における国際河川と近世～現代における国際河川の対比、といった構想に基づくものであるし、東アジアの大河川と北日本の河川を取り上げたのは、王朝国家規模の経済と地域的経済との対比、近代化がきわめて緩慢であった流域社会とそれがきわめて急激であった流域社会の対比、といった構想に基づくものである。また「流通と生業」というサブタイトルは、古代～中世における文化的交流と近世～現代における経済的交流の対比、近代産業化以前の河川漁業とそれ以後の河川漁業の対比、といった見込みをこめてつけたものである。

それに研究成果の公開の場として、五カ年にわたって次のようなシンポジウム・講座を予定しているが、そのそれぞれのテーマにも構想の意図が反映されている。「モンゴルの過去と現在」「発掘・調査と保存・研究」「出土文物と流域文化研究」「水運と漁業」「古代中国史における南北問題と東西問題」「国際河川と民族」など。つまり、個別河川の個別分野の研究にいきなり踏み込んでいくのではなく、資料論・比較論などの問題を、おおげさにいえばユーラシア史研究・アジア史研究といった大きな視野から整理しつつ、それとの関連のなかで個別の研究を進めたいと思うのである。最終的には、『古代長江流域の民族と文化』『民族の試練―アムール川流域の人々』『北日本河川史の研究』という報告書を公表する予定であるが、単なる個別研究の羅列ではない、どの分野の研究にも貢献することのできる、歴史研究のあるべきモデルケースを提示できるものと確信している。

学内一三名（史学科・経済学部）・学外七名（京大・名大・早大・一橋大・東北大・北教大）のメンバーはすでに研究活動を開始しているし、ポストドクターをはじめ多数の大学院生を作業員とする、関連資料の網羅的なデジタル化と相互連関的な検索システムの構築もはじまったところである。この作業については、大学当局の格別の援助によって購入した大型のデジタル化システムが、その機能を十分に発揮することになろう。

くりかえしになるが、このプロジェクトで試みられる研究方法は、各メンバーが過去の研究の積み重ねのなかで、いつとはなしに共通のものとして獲得してきたものであり、文化学や社会学や経済学の十分な理論的議論をへて形成されたものではない。その意味においては、素人っぽさを笑われることになろうが、しかし、そこにこそ一つの自負が込められている。これから実施される作業は、こちたし理論のはてしない議論ではなく、あくまでも相変わらぬ資料の収集と解読の繰り返しであり、五カ年ののちに、その自然な帰着として、今回の構想を超えた新しい構想が生まれ出ていることを願っているのである。それが歴史研究の醍醐味である。〝千里の目を窮めんと欲してさらに上る一層の楼〟とはいうが、楼層が高ければ高いほど、風も強く緊張感も大きく、支えなくしては階段を上ることができない。教職員学生をはじめ、関係各位のご理解とご支援を切にお願いしたいと思う。

東北学院の歴史と先人たち

大正デモクラシーと東北学院

経済学部教授　岩本　由輝

デモクラシーを民主主義と訳せなかった時代がある。第二次世界大戦で日本が敗れる以前の天皇主権の大日本帝国憲法のもとでは、主権在民を意味する民主主義は禁句であった。宮城県志田郡古川町（現古川市）出身の政治学者吉野作造はデモクラシーを民本主義と訳して、民衆の政治参加を主張するが、そこには政治の目的は民衆の福利にあり、政策決定は民衆の意向によらねばならないとする考えが根底にあった。大正デモクラシーの時代は、このような考え方が台頭した時期で、一九一二年の第一次、一九二三年の第二次の護憲運動を経て、一九二五年に普通選挙法の成立をみるわけであるが、この時期に本学は大正デモクラシーの思潮をキリスト教精神に基づき発信する重要な拠点の一つであり、その歴史をたどることによって日本における民主主義の受容と展開の一局面を解明することができるのである。

本学ではさきに『島崎藤村と東北学院』と題して、本学創立期の事跡を明らかにする事業を行ったが、二〇〇六年に創立一二〇周年を迎えるにあたって、その事業の一環として『大正デモクラシーと東北学院』と題し、当時のOBたちの社会的活動を明らかにする調査委員会を本年度から発足させ、具体的な資料採訪に着手している。

手始めに、本学の理事長を一九四四年六月一日から四七年七月二五日まで（第五代）と一九六二年四月六日から六四年一〇月一一日の長逝の日まで（第七代）務めた杉山元治郎についての調査に取りかかっている。一九四二年二月一五日から四八年五月一〇日の公職追放までと一九五一年四月三〇日から六三年一一月二一日の落選まで衆議院議員となり、一九五五年三月一八日に衆議院副議長に就任した杉山の党籍は、戦前は無産政党、戦後は日本社会党であった。この杉山は、本学神学部を一九〇九年三月二九日に卒業したOBである。

杉山は、一八八五年一一月一八日に大阪府日根郡下瓦屋村（現泉佐野市）に生まれるが、大阪府立農学校に在学中の一九〇二年に洗礼を受け、同校卒業後、和歌山県農会に技手兼書記として勤務する。しかし、キリスト教伝道に努める気持をもだし難く、一九〇六年四月に本学神学部別科に入学し、当時の院長シュネーダーの薫育を受ける。

一九〇九年三月、本学卒業後、仙台市内の東六番丁教会牧師となるも、健康を害し、一時、静養を余儀なくされるが、一〇年七月一七日に福島県相馬郡小高町の小高教会の牧師として赴任する。小高教会は信者の数も少ない、小さな教会で、先輩の沖野岩三郎をして、杉山は月給一円五十銭の牧師である、といわしめている。信者の数はなかなか増えなかったが、杉山のもとには杉山が農学校時代に学んだ農業技術の教えを乞いに来る農民が集まった。「耶蘇の話はぜえから、是非、農業の話をしてくんなれ」という農民の願いに杉山は快く応じた。折から一九〇三年に農商務省が系統農会を通じて打ち出した農事改良が相馬地方にも入ってきた。それは農民から見れば、手の届きそうもないハイテク技術を要し、杉山はみずから学んでいた知識を惜しみなく農民に伝授した。耕地整理の進捗とともに導入された牛馬耕用の犁が買えない農民たちに「杉山式互用犁」を発明して特許をとり、それを〝村の鍛冶屋〟に製造させ、実費で農民たちに他の市販品より安く提供した。また、刈敷や堆肥にかわるものとして化学肥料がつかわれるようになるとき、その効能に関する知識も農民に伝授した。

そのような中で、杉山は訪れる農民のなかに地主・自作・小作という階層があり、その間の対立が拭い難いことを知る。そのとき杉山は、断然、小作の側に立つことを決意し、賀川豊彦とともに土地と自由のために日本農民組合設立を推進し、大正デモクラシーの実践的体現者となる。

第54回東北地区大学総体男子は総合二連覇達成

第五十四回東北地区大学総合体育大会が、六月十三日から七月一日まで秋田大学の主管で実施され、総合成績で男子が二年連続総合優勝を果たしたが、女子は惜しくも準優勝と二年連続のアベック総合優勝を逃した。

大会には東北地区四十八大学から六千九十三人の選手が出場し、本学からも三百八人が参加した。学校対抗で男女総合で二連覇をねらう本学は、男子の部で参加十六種目中二種目の優勝と苦戦が続くも、二位、三位種目で確実にポイントを上げ、二年連続四十回目の総合優勝を果たした。

一方、女子も参加九種目中三種目で優勝したものの、二位種目を加えてもわずかに及ばず準優勝にとどまった。

種目別の成績はは次の通り。

◇**男子の部**　▽優勝＝剣道（3年連続25度目）、サッカー（4年ぶり21度目）▽2位＝ソフトテニス、バスケットボール、ラグビー、バドミントン▽3位＝水泳、硬式野球、準硬式野球、ハンドボール、卓球、弓道、体操

◇**女子の部**　▽優勝＝ソフトテニス（2年連続13度目）、バスケットボール（13年連続18度目）、剣道（3年連続8度目）▽2位＝卓球、バドミントン、弓道

第5回世界マスターズ柔道大会高橋富士男（職員）さんが優勝

六月二十三日から二十八日にかけて、第五回世界マスターズ柔道選手権大会（会場：東京・講道館）が開催され、三十歳から八十歳まで生涯スポーツとして柔道を愛好する総勢九百三人の参加者が世界三十八カ国から集った。

百kg以下級（五十五歳から五十九歳の部）に出場した本学職員の高橋富士男さん（多賀城キャンパス事務長補佐・**写真中央**）が見事優勝し、金メダルを獲得した。

試合はリーグ戦形式で行われ、同階級は参加者五人と少なかったものの、オランダ世界大会代表やアメリカ代表など屈指の強豪が揃うなか、初戦の一本勝ちで波に乗り、連続三試合一本勝ちを含む四試合を全勝で飾り見事優勝を果たした。高橋さんは「二十五年ぶりの公式戦で緊張した」と試合を振り返ったが、早くも次回開催のオーストラリアでの連覇に期待がかかる。

大学後期学納金

納入期限は10月15日

平成十五年度の大学後期学生納付金の納入期限は十月十五日となっています。学生納付金払い込み用紙はすでに保護者宛に郵送していますので、最寄りの銀行にて払い込んで下さい。お問い合わせは会計課（☎022―264―641）までお願いします。

中鉢憲賢教授に応用物理学会功労証

八月三十日付で工学部の中鉢憲賢教授（前工学部長）に応用物理学会から功労会員証が送られた。応用物理学の発展に貢献し、その功績が顕著であったことが認められたもの。

東北学院大学公開講座

キリスト教文化講座

日時　10月14日～28日に5回開講。午後6時～8時。

会場　土樋キャンパス5号館5階第一会議室。

受講　先着60人。どなたでも歓迎。受講料は千円。

申込先　所定の申込書でキリスト教文化研究所（仙台市青葉区土樋一丁目3の1☎022―264―6401）。当日も受付けます。

講義　10月14日「キリスト教は『敵を作る宗教』か？―『問い』としての環境考古学―」佐々木勝彦教授、10月17日「乱れと摂理」長島慎二助教授、10月21日「スチュワードシップ」保坂和男教授、10月24日「母国語聖書の始まり：ティンダール英訳（1522）、ルター独訳（1534）、オリヴェッタン仏訳（1535）」野村信助教授、10月28日「申命記の教育思想」原口尚彰教授。

2003W・S・B・R総合二連覇ならず!!

七月二十五日、二十六日の両日、秋田県「大潟村ソーラースポーツライン」で開催されたワールド・ソーラーバイシクルレース（W・S・B・R）に、今年も工学部のエコのパワー研究会と有志、OBらによる混成チームが参加。惜しくも総合優勝を逃したものの、二時間十分五十二秒のタイム で総合準優勝を果たした。

例年、車両製作および保守・点検等は本学工学部エコノパワー研究会が実施しているが、競技開催日程が定期試験期間中のため、今年もOB会であるラグタイムス仙台がサポートを担当し、試験日程の異なる文系学部の学生諸君による有志のライダーに松岡大介君（法3）と高橋辰徳君（経済2）らの加入を得て参加したもの。

参加してくださる方もいます。

今年は六月二十八日に石川県の金沢で、母校よりお二人の方をお迎えし同窓会を行った。会では、伊藤忠栄工学部教授が東北学院の新しくできる高校の校舎のことや大学の近況報告をお話下さり、続いて関寛総主事には現在の同窓会の働き、百周年記念の行事についても伺うことができた。全員で十二人の小さな集まりではありましたが、それぞれの近況や学生時代の話などを語り合いながら楽しい時をすごした。来年は富山に場所を移して同窓会を開く予定となっている。

〈支部長　**朝倉　秀之**〉

北陸支部

北陸支部は福井県、石川県、富山県の三県に在住する同窓生が一年に一度集まる会で、この北陸三県には名簿上百十人ほど同窓生がいることになっているが、集まってくる同窓生は、十人から二十人の間で、福井、石川、富山と集合場所を変えて同窓会を開いている。中でも石川開催が一番多くなるように組まれており、毎年、この同窓会を楽しみに